

臺天目作法

なり、

一片口を持出、水指に水を繼仕廻候也、

〔臺子まきまやうの時かざり様の事〕臺天目の習

一臺天目にて茶を立る時は、臺の上にて湯をも茶をも入て立ると紹鷗は相傳せられ候、然ども天目を臺よりおろして立て客へいだす時、臺にのせてまいらするもよし、

一臺は初水こぼしのわきへよせ置候を、茶わんに湯を入れて置候時分に臺をとつてよくふく也、一臺天目にて茶をのみ候に、むかしは臺をもともに持てのみしなり、是あぶなくてあしく候ゆへ、臺ともにとつて臺を下に置、天目ばかり持て吞たるがよく候、次の人にわたす時は、又臺にのせてわたすべし、

一茶のみはて、茶わんを見て其次にわたし、又臺をも見るなり、見やうは盆の見やうと同前なり、扱ていしゆにかへし候時は、臺にのせてかへすこと本なり、貴人の御前ならば下にも置べきが、いづれも當座のまゆびたるべし、

右之條々すき道の一秘事にて侍れば、漫に人に相傳あるまじく候、あなかしこく、

天正十五亥ノ二月吉日

万貫や

新四郎殿參

利休宗易判

〔茶道織有傳〕眞の臺子の事 附リ風爐

臺天目にて茶をのむには、上客は臺ともにとりていたゞき、臺と天目との間にふくさ有べし、臺を下におき、ふくさともに茶碗をとり、色を見てのみ、次の人にはつねのごとくわたし、臺を順々におくる也、扱茶をのみままい、つねのごとく茶碗を見て、ふくさ共に茶碗ばかり返し、一禮してさて手前のふくさととり出し、臺を見て返し、扱茶入をのぞむなり、茶入ばんともにとり、いづれも